

人体クロッキーの指導法に関する一考察

桶田 洋明*

(2008年10月30日 受理)

A Study of Teaching Methods for Figure Croquis

OKEDA Hiroaki

要 約

クロッキーの種類や役割を、過去の文献等から考察した上で、他の類似語の役割には見られない、クロッキー独自の役割や目的を導き出す。その上で、その役割を果たすクロッキーの種類における指導法を検証していく。その後、短時間描写が最大の特徴であるクロッキーの魅力を引き出すモチーフのひとつである、「人体」の描画指導について考察する。一般学生によるクロッキー授業を実施し、制作回数が増すごとに指導内容を追加することで、短時間で描くクロッキー制作が順調に上達していく様が見られた。本研究により、クロッキー指導を客観的に、体系立てて実施することが可能になると思われる。

キーワード クロッキー、スケッチ、美術教育、人物画、絵画

I はじめに

本稿は、平成21年3月発行の鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要第18巻「美術教育におけるクロッキー指導に関する一考察」と、同大学教育学部研究紀要第60巻「人体クロッキーの描画法に関する一考察」の拙稿に並行して研究したものである。

絵画分野におけるクロッキーの役割は、対象を正確に描き写すだけでなく、線描を中心とした最もシンプルな表現方法のひとつである。しかし、今日の美術表現に見られる多種多様な表現方法の出現によって、平面表現の根幹を担っているとも言える、クロッキーのような基礎的表現手段を学時間の割合がやや小さくなってきた感がある。

学校現場においても、多様な表現方法を基にした授業が大勢を占めており、授業時数の減少という現実も伴って、ますます基礎的表現分野の扱いが減少している。殊に人体をモチーフとした

* 鹿児島大学教育学部 准教授

表現については、自画像や構想画の類ではよく登場するが、モデルを用いたオーソドックスな描画はあまり行われていないと思われる。

そこで本研究では、技法書等における人体クロッキーの扱いについて検証し、より具体的なクロッキーにおける指導法の一例を導き出し、授業実践を含めて考察をしていくこととする。次章ではまず、クロッキーの定義や種類を含めて、クロッキーを行うことの意義について考察していく。

Ⅱ 人体クロッキーの役割

1. クロッキーの種類

クロッキーは、絵画における基礎的な能力を身につけるために行われる。その中でも特に、短時間描写・速写の能力を身につけるためには最適である。このことは、前述の研究紀要「人体クロッキーの描画法に関する一考察」にて詳細を述べている。

日本ではスケッチもクロッキー的描画方法として使用されることが多いが、スケッチは素描のような長時間描画にも使用されることが多いなど、かなり広義に用いられている。したがって、速写画としてはスケッチよりもクロッキーの方が使われる機会は多い。

また、クロッキーの種類に関しては、前述の研究紀要に挙げている通り、以下の4つに分類できる。

1. 線のみによる描写
2. 線＋一部の陰影描写
3. 線＋一部の陰影＋骨組の描写
4. 線＋着彩（陰影・固有色等）

主に制作時間の違いによって分類することができるわけだが、結果的に用途や役割の違いも見受けられる。

本研究では最も短時間で仕上げる、1つめの線のみによる描写を中心に検証していく。

2. 人体クロッキーの役割

本節では人体クロッキーの意義を立証するために、その役割を挙げていくこととする。

人体の描写技術を身につけるためには、言うまでもなく実物をしっかり観察しながら一枚でも多くの習作を描くことが第一に挙げられる。そのためには人物モデルを用いた制作が不可欠であろう。しかしながら、人物は静物や風景と違い、長時間同じ状態で留まっているわけにはいかない。おのずと限られた時間内で制作を終了しなければならない。そのような状況下での最適な描画方法のひとつにクロッキーが挙げられる。前節で述べたクロッキーの種類を制作時間に応じて

選択することで、幅広く人体描画の訓練が成されると思われる。またクロッキーは、5分程度の短時間描写にも適応しているため、数多くのポーズを描くことができ、人体の立体的構造の把握に最適な描画方法であると言える。

以上を踏まえて、次章ではクロッキーの授業等を通して考察した指導法とその指導例について述べていきたい。

Ⅲ クロッキー指導の観点について

1. アンケートや授業実践から

本節ではまず、鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要第18巻「美術教育におけるクロッキー指導に関する一考察」で考察した、クロッキーに関するアンケートおよび授業実践の結果についてまとめてみたいと思う。なお本調査は、本大学の教育学部美術専修生が受講していない講座にて実施したものである。

まず、アンケートの結果の一部を羅列してみると絵画全般に関する問いについては以下のとおりである。絵を描くことへの関心は非常に高いが、それとは反対に絵を描くのが「嫌い」と答える学生も多数いたこと。絵を描くことと、人物を描くことが嫌いという理由のいずれにも「リアルに描けないから嫌い」「見たままに描けないから嫌い」という意見があったこと。「嫌い」だという学生の中には、「描き方が分からない」「よく見ているのに描けない」といった意見などが挙げられた。

更に、クロッキーについては、言葉への認識度は約半数、また半数弱の学生はクロッキー制作を経験していること。言葉も知らない半数の学生は、授業でも経験していないため、各々が自主的に学ぼうとしない限り、クロッキーを学ぶ機会はないことなどが理解できた。

これらのアンケート結果を基に授業計画を立て、実践した。対象はアンケート実施者と同様、本大学の教育学部美術専修生以外の学生である。人物をモデルに5分間のクロッキーを複数枚描き、制作前にクロッキー制作のポイントを助言した。ポイントの詳細は以下の通りである。

第一段階

- ・線だけで描く
- ・消しゴムは使わない
- ・時間内に描ききる
- ・頭から足までなるべく大きく入れる

第二段階

- ・大きな塊としてとらえる
- ・中心線を意識して描く
- ・一本の線を長く描く

第三段階

- ・大きめのシワを描く
- ・直線に近い部分と、曲線の部分との描き分けをする

第四段階

- ・垂直・平行線を想定して角度を導く
- ・先入観をすて、客観的に見るようにする

第五段階

- ・時間が余ったら細部を描き、斜線で陰影をつける
- ・形が取れるようになったら、筆圧を調節して線の強弱をつける
- ・鉛筆を長く持つことでストロークの長い線が描けるようになる

授業実践の結果を簡単にまとめてみると、まず、概ね実施学生のクロッキー作品は進歩が見られたと言える。しかしながら、こちらの予想に反した状況も多々見られ、反省点としてポイントの順番を変更する必要性を痛感したことも事実である。特に、鉛筆の持ち方など基本的な事は、初期の段階から指導を行っていたら、長いストロークで描くようになっていたのではと推測できる。また、段階が進むにつれて自然と改善はされたが、対象をじっくりと見ていないためにモチーフを把握できず描けないと感じる学生に対しては、顔を上げて観察する事が重要だというアドバイスも必要であった。それらを踏まえて、2回目の実践を行った。その過程や結果を次節にまとめてみたい。

2. 実践の成果

前節の授業実践の反省点を生かし、同様の人体クロッキーを行った。なお前回同様、今回も本大学の一般学生による制作である。制作時間はすべて一枚5分、用紙とサイズは画用紙でF6号、使用描画材は5B鉛筆のみとした。

クロッキー制作のポイントは以下のように計画した。

第一段階

- ・鉛筆の削り方について
- ・消しゴムは使わない
- ・時間内に描ききる
- ・線だけで描く
- ・顔は細かく描かない

第二段階 (構図)

- ・描く姿勢 (ポジション) について

- ・なるべく頭から足まで大きく入れる
- ・大きな塊としてみる

第三段階（線）

- ・一本の線を長く描く
- ・探りながら描かない
- ・観察時間と描写時間の割合
- ・鉛筆を長く持つ（図1）

第四段階（形体（2次元的））

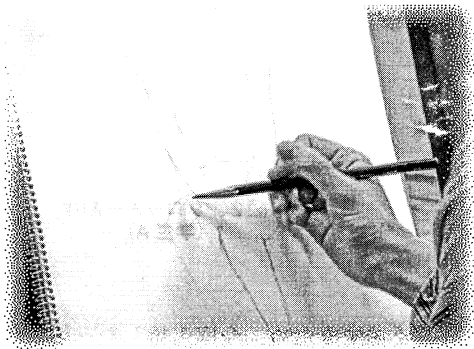
- ・大まかな比率
- ・中心線を意識して描く、大まかな動勢
- ・垂直・水平線を想定して角度を導く
- ・左右の肩・腕・腰・足の傾きの差を意識する
- ・直線に近い部分と、曲線の部分との描き分けをする

第五段階（形体（3次元的））

- ・左右の肩・腕・腰・足の奥行きを意識する
- ・筆圧を調節して線の強弱で奥行きを表現する
- ・大きめの服のしわを描くことで、隠れている身体の動き・太さ・大きさが表現できる

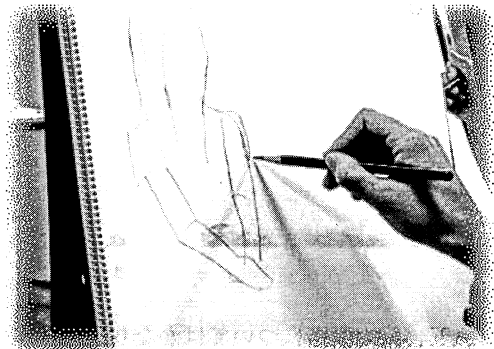
第六段階

- ・パースペクティブを意識する
- ・時間が余ったら細部を描き、斜線で陰影をつける
- ・先入観を捨て、客観的に見ることを心がける

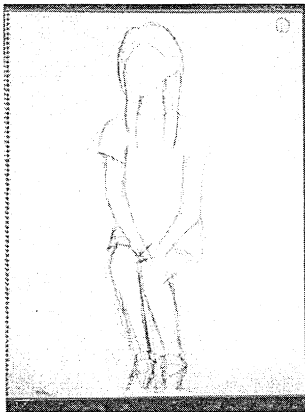


指導前

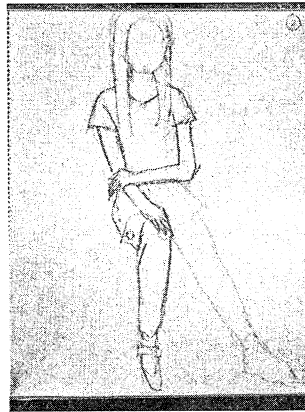
図1. 鉛筆の持つ位置に関する指導



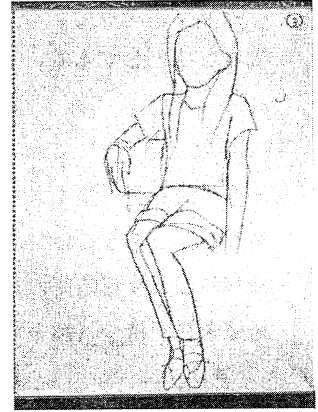
指導後



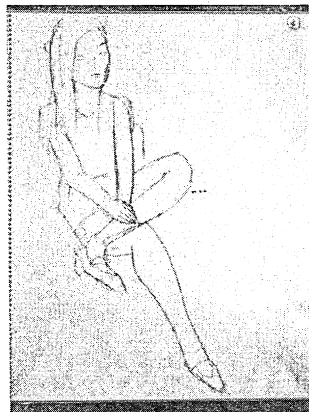
1



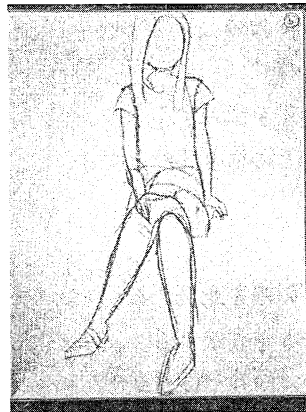
2



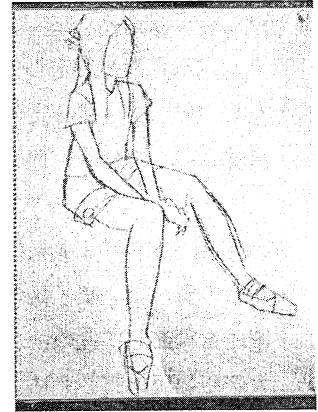
3



4



5



6



7



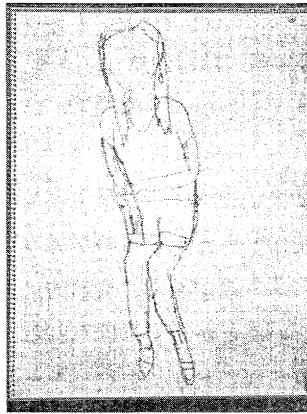
8

図2. クロッキー制作
(学生A)

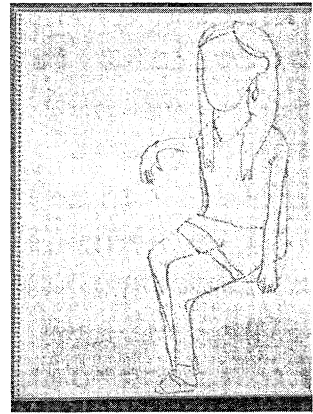
第五、第六段階についてはかなり高いレベルの描画を要求するため、今回実施した一般学生向けの講座での必要度は低いと思われるが、美術専門の学生にも対応できるものとしてまとめている。



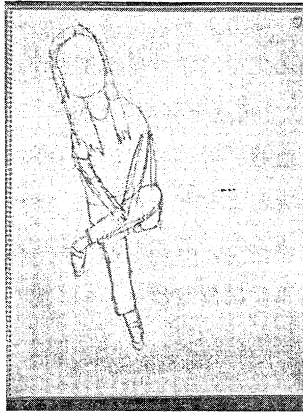
1



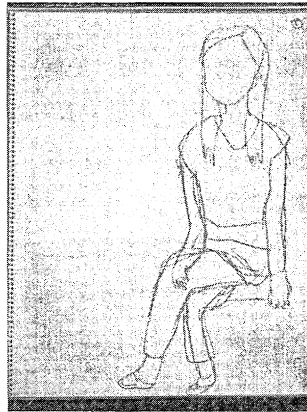
2



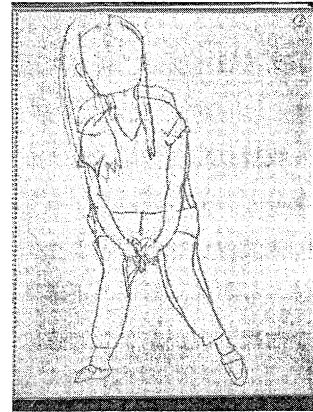
3



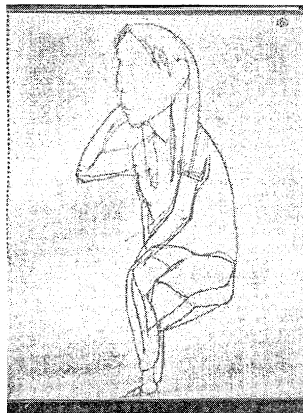
4



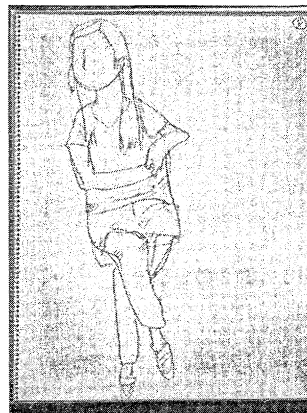
5



6



7



8

図3. クロッキー制作
(学生B)

る。また、各段階における制作枚数については特に明記していないが、当然ながら枚数が多いほうが到達度は高くなる。

図2、3は一般学生によるクロッキー作品であり、1枚目から8枚目までを掲載したものである。2つとも、作品1を制作する前に第一段階のポイントをアドバイス、作品2の前に第二段階、作品3・4の前に第三段階、作品5・6の前に第四段階、作品7・8の前に第五段階のポイントをアドバイスしている。

全体についてまず述べると、図2の学生Aは一般学生としてはかなりの描写力を持ち合わせているようで、一枚目から形体を的確にとらえているのが読み取れる。しかし線の強弱等については、最初の頃の作品ではまだ迷いのある線が多く、造形的に力強さに欠けている。図3の学生Bは人体の大まかな比率がとれていないことがまず挙げられるが、枚数を重ねるたびに改善が見られた。また線の強さは当初から表現されており、クロッキーとしての持ち味は表現されていた。

図2の学生Aの作品をあらためて検証すると、3枚目から線の質の向上が見られる。これは3枚目を制作する前の第三段階にある「一本の線を長く描く」「探りながら描かない」「鉛筆を長く持つ」のアドバイスの効果であると思われる。図1のように鉛筆を持つ場所を変えることで、長いストロークによって表現することが可能となった。また、第四段階のアドバイス「大まかな比率」「中心線を意識して描く」「大まかな動勢」「垂直・水平線を想定して角度を導く」によって、6枚目以降の作品にはよりの確な形体表現が見受けられる。さらに「直線に近い部分と、曲線の部分との描き分けをする」というやや難易度の高いアドバイスも取り入れようとした結果、線の抑揚表現が見られるようになった。例えば足の形体表現について見てみると、最初の頃の表現は硬さもあり、形体の正確さに欠けているが、後半の表現ではふくらはぎや足首の細さなど、微妙な曲線表現がかなりの確にできているのがわかる。



図4. 図2の3部分

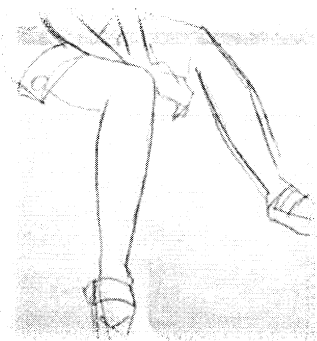


図5. 図2の6部分

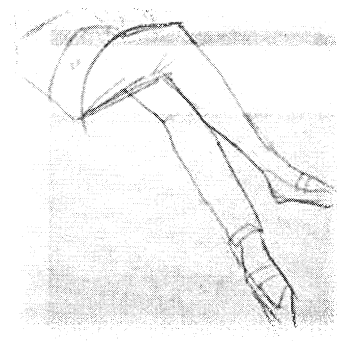


図6. 図2の8部分

図3の学生Bの作品は前述のとおり、人体の比率が的確に表現されていないため、特に最初の頃の作品に形体の狂いが見られる。しかし、第二段階のアドバイス「なるべく頭から足まで大きく入れる」「大きな塊としてみる」によって、2枚目以降はかなり改善されている。また、線の強さは当初から見られたが、人体の関節を軸とした線の変化などについては、あまり表現されていなかった。これらの点についても、第四段階のアドバイス「大まかな比率」「中心線を意識し

て描く」「左右の肩・腕・腰・足の傾きの差を意識する」「直線に近い部分と、曲線の部分との描き分けをする」によって関節箇所表現に伴った線の強弱と方向性が表現できるようになった。図7, 8の作品は、腕の肘や手首の箇所がはっきりせず、まだ前腕と上腕の長さの比率も合っていないが、図9, 10になると、かなりの確に表現されている。前半の作品は、手首や肘の箇所でも線を留めないでつながったまま描写したため、骨格の構造が描かれていなかったが、後半の作品では、関節でストロークを区切って描写しているため、自然な骨格表現が見られる。

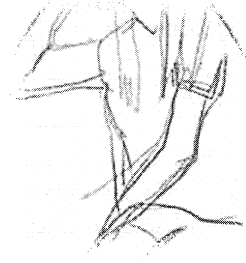
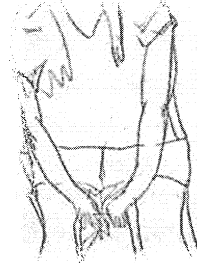
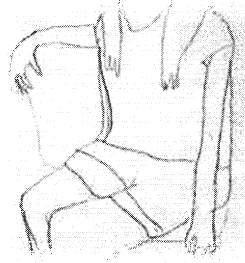
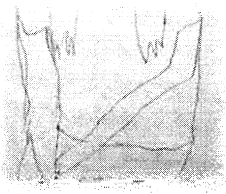


図7. 図3の1部分

図8. 図3の3部分

図9. 図3の6部分

図10. 図3の7部分

以上、実際のクロッキー作品による検証から、指導の効果について考察した。本稿の前半で述べているとおり、個々の描写能力に応じた指導が必要であり、そしてそのような指導がしやすいアドバイスの組み立てや流れが必要であろう。今回の試作による2作品のアドバイスに関しては、個々の特徴に応じた指導ができ、その結果も作品に表出していたため、一定の成果があったと言えよう。

IV. おわりに

本研究ではクロッキー教育の意義と指導法について研究し、ひとつの実践をもとに研究の確認を行った。短時間で行えるクロッキーは、美術科の授業時数が少ない教育現場においては有効的題材であると思われる。また、特に人物クロッキーの場合は、時間的拘束が強くなる分緊張感も増し、集中して制作に取り掛かることができるという点においても魅力ある授業になると思われる。

今後はさらに実践を深めて、さらに描写能力や描写目的に応じた、より体系的で効果的なクロッキーの指導法を導き出していきたい。

図版出典

すべて著者撮影